

【報告】祥明大學校での四日間

第11回学術フォーラムと第19回熊本県立大学韓国文化探訪団

馬場 良二、吉井 誠

毎年、6月末から祥明大學校短期研修団が熊本県立大学に、そして、9月の中旬に熊本県立大学から韓国文化探訪団が祥明大學校を訪れます。また、熊本県立大学・祥明大學校学術フォーラムが両校で隔年開催されます。去年は、短期研修団とともにフォーラムの講師が来学しました。今年も、本学から日本語日本文学科の馬場良二と英語英米文学科の吉井誠が韓国へまいりました。

以下、フォーラムと探訪団について報告します。



韓国、仁川空港で、祥明大學校の学生たちの出迎えを受ける。



空港から高速バスに乗る。

黄教授、そして、学術フォーラムで発表する文学部からの馬場、吉井が集まりました。9名の学生は英文科の5名と総合管理学部からの4名で構成されていました。

韓国の空港では、祥明大學校の学生が出迎えてくれました。その中には、夏に研修団として来熊した学生がおり、探訪団は、嬉しい再会を果たすことができました。

9月10日（月）から13日（木）まで韓国を訪問する機会が与えられました。韓国の姉妹校、祥明大學校（天安キャンパス）への探訪団に同行し、熊本県立大学・祥明大學校学術フォーラムに参加し発表することが目的です。

2018年9月10日（月）の午後、熊本阿蘇空港に祥明大學校文化探訪団の学生9名と引率の総合管理学部、



車窓からの夕暮れ。



天安市バスセンター近くのドン・キホーテ像を見上げる。

空港からは、高速バスで忠清南道天安市へ2時間の移動でした。夕日の中をバスは進みます。周りの景色に魅せられながら、次第に辺りは暗くなり、室内灯を落としたバスの座席で皆ウトウト。

天安市に到着したのは夜8時過ぎでした。市内のバスセンターの近くで迎えを待ちます。ドン・キホーテの銅像が目印でした。学生はそれぞれのホストファミリーに引き取られ、学生寮組の2名と我々教員3名は、祥明大、日本語圏地域学専攻の先生方主催の夕食会に向いました。

会では、夏に学生を引率して来熊された柳京子教授や、熊本県立大学大学院を修了して祥明大で日本語の講師をしている飯干和也先生、専攻長の金裕千教授などが暖かく迎えてくださいました。

この日の夜は大学のキャンパス内のゲストハウスで宿泊しました。長い1日でした。

翌日、9月11日（火）の朝、県立大学の学生、祥明大の学生さん、そして私達3名の教員は日本

語圏地域学専攻長の金先生に案内されてキム・ジェヒョン副総長を表敬訪問しました。笑顔で迎えてくださり、午後のフォーラムにいらっしやることでした。

副総長室を出て、祥明大の学生たちに案内してもらい、大学の施設を見て回りました。



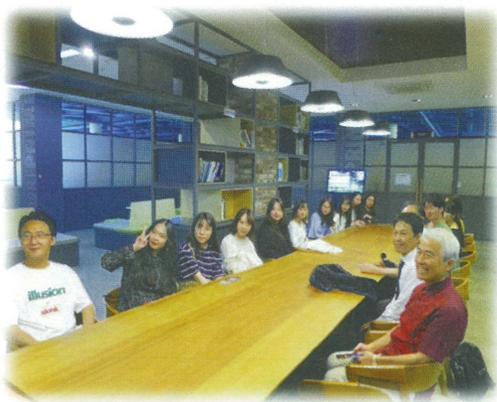
ゲストハウスに移動する前に、祥明大の先生方と韓国焼き肉をいただく。

最初に図書館に連れて行ってもらいました。司書の方が図書館内の主要な場所を案内してくれました。

左のようなAudiobook専用の検索機が設置されており、学生は自由にAudiobookをダウンロードして聴くことができます。韓国のIT分野は進んでいると聞いていましたが、その隆盛の一端を垣間見た思いがしました。



図書館におかれている、Audiobook専用の検索機。



超スタイリッシュな談話室。

この大学にはマンガを専門とする学科があり、独自の図書室を持っていました。



図書館内の漫画の図書室。



祥明大学校の学生たちと、体育館で。

図書館には、談話室もありました。まるで、お洒落なカフェです。

図書館の中のコンピュータ室も、明るくてモダンなデザインです。



日本ではありえない、図書館のコンピュータ室。

そこには日本の漫画も多数揃えられています。韓国語で書かれてあり、新鮮な驚きを感じました。



ハングル表記の日本の漫画。

多目的に使用されるという体育館も見学しました。広く、また、電光掲示板などを完備し、バスケット等の試合が本格的にできるように設計されていました。



体育館です。

お昼をカフェテリアですませ、学術フォーラムが開催される会場に向かいました。フォーラムでは、「多文化共生—明日を考える」というテーマのもとに、県立大学の吉井と馬場、祥明大からはソ・ウナ助教授、ゲルト・イェンドラシエック助教授のお二人がそれぞれの発表を行いました。詳細は、後半をご覧ください。

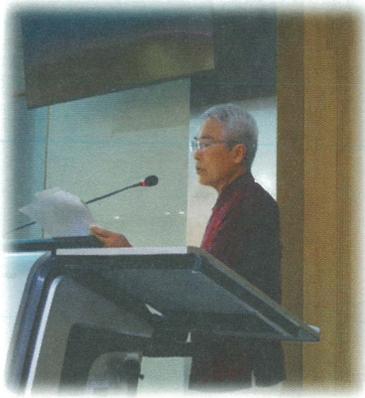
それぞれの発表の後、日本語圏地域学専攻の先生方がコメンテーターを務め、発表に対する感想や意見、並びに、質問をされました。4名の発表後、全員が壇上に登り、パネルディスカッションを行いました。時間いっぱいまで、聴衆からの質問に応えました。



左から、馬場、副総長、吉井、黄。



発表中の吉井。



発表中の馬場。



祥明大学校の学生が質問をする。

フォーラム後に、フォーラム会場と同じ建物の最上階にあるカフェテリアで、歓迎会が催されました。自由にとって食べるビュッフェスタイルの夕食会から始まりました。祥明大学校の先生方と、お互いの留学経験や専門分野のこと、姉妹校としての体験談などについて話し、歓談の時を持つことができました。食事の後には、探訪団一人一人とホームステイファミリーの紹介がありました。日本語を学習している学生たちの流暢な司会進行によって進められました。



パネルディスカッションの様子。



学術フォーラムの後の歓迎会で。

歓迎会の後には、日本語圏地域学専攻の先生方に招かれ、見晴らしの良い丘の上にあるカフェで夕涼みをしながらしばらく歓談の時をもちました。祥明大学校の先生方との良い交流の場となりました。



祥明大学校の近くのカフェテラスで。

9月12日（水）は祥明大学校の学生にガイドを務めてもらい、ソウル、チャンドックン（昌徳宮）の観光に同行しました。チャンドックンは李氏朝鮮の宮殿です。学生たちは日本語



昌徳宮の建造物群は、1997年にユネスコの
世界遺産に登録された。



お姫様と王子様。

と韓国語を交えながら、すっかり打ち解けていました。

伝統衣装だと、入場が無料になります。宮殿前の店で借りた衣装に身を包み宮殿内を散策しました。写真を撮ろうと立ち止まると、他の外国人観光客から、一緒に写真を撮って欲しいというリクエストを何度も受け、モデルになったかのようなようでした。このモデルさん達が日本人であることを知らずに写真を撮っている人も中にはいたようです。



昌徳宮の近くの食堂で、ランチ。



ソウル、ホンデにある韓日社会文化フォーラムの事務所の前で。

探訪団と行動を共にしたのは、9月12日（水）までで、13日（木）は、日韓交流を推進しているNPO「韓日社会文化フォーラム」の事務所と韓国語教室、カフェを訪問しました。

韓国の方がボランティアで日本人に教えている様子を見てみると、二つの国の間の壁というものは感じられません。事務所、カフェで働いているインターンたちは、日本ばかりでなく、フランス、サウジアラビアからも来ていました。

第11回 祥明大學校・熊本県立大学 学術フォーラム

多文化共生—明日を考える

日時：2018年9月11日（火）13:00

場所：祥明大學校ハヌリ館311号教室

多文化社会に向けて—文化適応のプロセスから考える—
吉井 誠（熊本県立大学教授）

多文化のおとぎ話を活用した多文化理解教育の方法に関する研究
—日本のおとぎ話を中心に—
ソ・ウナ（祥明大學校助教授）

パプアニューギニア生活の教訓：多文化主義の市場モデル擁護論
ゲルト・ヤンドラシェク（祥明大學校助教授）

韓国と私
馬場 良二（熊本県立大学教授）

多文化社会を迎えるにあたり我々はどんな準備をしていくべきであろうか。どんなことを考えていかなければいけないのだろうか。

発表では文化を学ぶ過程について紹介し、異なる文化とどのように接していけばよいのか共に考える機会とした。私自身の留学体験を具体例として取り挙げながら、文化習得の過程について紹介した。最初にアメリカでの留学経験を話し、それに関連付ける形で、「関与と独立」の考え方、文化適応のモデルを紹介し、異なる文化との対応の仕方について提示した。文化適応モデルでは、U字型適応モデル (Lysgaard, 1995)、W字型適応モデル (Gullhorn & Gullhorn, 1963)、らせん型適応モデル (Kim & Ruben, 1988) に言及し、新しい文化に適応するとはどのようなことかについて話した。最後に、相互理解の難しさ、それを認識したうえで歩み寄ることの大切さに触れて締めくくった。

多文化のおとぎ話を活用した多文化理解教育の方法に関する研究

—日本のおとぎ話を中心に—

ソ・ウナ

この研究では、多文化理解教育の抱える問題点と、文化のおとぎ話を活用した多文化教育の方法について考えてみた。多文化教育といえば、外国人を対象に韓国文化を教えることが一般的である。内国人を対象とする多文化教育は少ないだけでなく、それさえもいくつかの料理を作るとか、伝統衣装を着るといった一回性の体験行事が主をなしている。このような形での教育は、共に暮らしていくための教育ではなく、ただ見た目だけの観光体験の水準を免れないという点で問題がある。多文化理解教育は、単純に認識の文化一般についての知識伝達中心の教育になってはならない。それよりは、生活のための教育にならなければならない。そのためには前の世代の生の教訓が溶け込んでいる多文化のおとぎ話を積極的に活用する必要がある。ところが、韓国国内に紹介されている日本の童話の翻訳の実態を見てみると、可読性を考慮してあらすじの一部を省略したり、韓国語の文化に合わせて翻訳する慣行が認められる。そのため、実際には日本の童話の中に日本の文化を見つけにくいという問題が見えてくる。したがって、多文化理解教育を目的として日本のおとぎ話を翻訳する場合、日本の文化がはっきりと表れる版本を選ぶべきである。

パプアニューギニア生活の教訓：多文化主義の市場モデル擁護論

ゲルト・ヤンドラシエク

私はパプアニューギニアで、合わせて14カ月の間研究を行いました。その大部分を約千名の住む村で過ごしました。私の経験に触れつつ、文化とその進化、及び相違なる文化間の接触について考えてみたいと思います。本発表では、経済開発や構成員の福祉に否定的な影響を及ぼす文化の一側面について説明します。パプアニューギニアで見られる多くの文化のパターンは、他の開発途上国でも見ることができます。したがって、自己集団の文化であるか、他者集団の文化であるかに関わらず、文化とは客観的に評価されなければならないと思います。多文化社会の強みは、多様な行動様式を比較し評価することができるという点です。多

文化主義の市場モデルとは、文化的な選択が提供され、比較され、選択される社会に対する隠喩です。自己の文化を放棄するのではなく、より多くのオプションに接し、収集し、評価して、文化について客観的に学ぶことなのです。それは逆機能を認識し改善することを学ぶことなので、自身の生により多くの自由は統制力を得ることを意味します。

韓国と私

馬場 良二

祥明大學校、当時の祥明女子大學校を初めて訪れたのは、1990年、私が熊本県立大学、当時の熊本女子大学に赴任した翌年でした。天安への30年間は、県立大学での30年にぴったり重なります。

私が初めて韓国人と触れ合ったのは、学部の子生のときでした。進学した大学院では、同期に2人、韓国人がいました。その後、日本語学校に勤め、熊本へやってきました。

私にとって、韓国とは人です。いろいろな人にたくさんのことを学んできました。



韓国、祥明大學校チョナン校、ハヌル館前の夕日。

今回の祥明大學校との交流をとおして、改めて感じたことがあります。フォーラムのテーマは「多文化共生」でした。お互いを知ることは、重要です。そのためには、時間と場所を共有することが欠かせません。今回の交流の中で、食事を囲み、色々な事を話すなど、共に過ごす時間が持てました。このような地道な歩みが、「異文化理解・多文化共生」にとって重要であることを再認識しました。

このような機会を与えてくださった祥明大學校の教員の方々、学生の皆さんに心より感謝申し上げます。